福島県立博物館　第２期中期目標の総括

平成 30 年度は、第 2 期中期目標の最終年度に当たるため、5 年間の総括を行いました。以下に「活動の指針」に沿って成果と課題をまとめました。

１．地域の文化遺産の収集と継承

【成果】

資料整理では一次資料の登録とデータベース公開は、５年を要せず目標値を達成した。図書の修正は、新規図書登録と並行しながらの作業であるが、おおむね目標を達成できた。資料の安全な保管に関しては、震災遺産類が新たに博物館資料として位置づけられたことも含め、資料数が増加している。これに伴い収蔵庫の整理を行い収蔵庫や棚使用の効率化を一部実現した。ＩＰＭに関しては、職員向け講習会の実施、保存環境調査（文化財害虫・カビなど）の結果・対処方法を会議で報告したことにより、IPM を導入する基礎作りが完了した。

【課題】

資料の安全な保存に関しては、資料受入数の増加に対し燻蒸→収蔵のサイクルが連動しきれていない現状がある。要因の一つは燻蒸能力の低下であり、一つは収納スペースのひっ迫である。前者は最新式燻蒸庫への更新、後者は収蔵棚の増設が解決策になるが、まとまった予算措置が必要であり、関係部局と課題を共有して協議を継続しているが実現には至っていない。これらは博物館活動の根幹をなす部分であり、何らかの措置が取られない場合、資料の保全と活用に大きな影響が生じると思われる。ＩＰＭについては、生物被害防除を実施する体制を確立することはできなかった。また近年、空気環境（化学汚染物質）の清浄化に関する指針が整備されつつある中で当館が採用している監視方法では実態を正確に把握することが不十分であるので、現在、監視方法の最適化を図る必要がある。

２．最新の研究による資料価値の発見

【成果】

連携した共同研究の推進では、大学や博物館等と連携した各種研究プロジェクトに毎年参画し、学会発表や公開シンポジウム及び報告書等で研究成果を発表した。とくに震災遺産について発信する機会が多くあった。また地元会津大学とソフトウエアを開発する取り組みも行なった。外部の研究費助成は、地方博物館が科研費の奨励研究に応募可能になり、いくつかの研究課題が採択されたことは今期の成果の一つである。

【課題】

研究費予算は前期比約２．５倍になっているが、学芸員一人当たりでみると小規模で、研究基盤としては貧弱と言わざるを得ない。今後も外部資金に積極的に応募する姿勢を保持しつつ、科研費では奨励研究以上の中型・大型の助成金を獲得するための環境整備が必要である。

３．来るたびに発見がある展示とニーズに応じた学習支援

【成果】

常設展については、学校団体に対して学習効果が高まるオーダーメイドの学習プログラムを提案・実施し、大変好評であった。また、グループごとに来館する児童・生徒に対して、月ごとにかわる展示室の「おすすめ」資料解説シートを作成した。企画展・特集展については、オリジナル企画を中心に実施することができた。3ヵ年計画を立て、準備のための館内会議を設定して内容の充実を図った。単館ではなく、多館と連携した展示も行った。

学習支援については、講座開催回数、参加者ともに、この五年間を通じて増加している。特に企画展・特集展関連事業は増加しており、これらの事業と連動した企画立案の計画が館として共有され始めている。また、講座参加者の顔ぶれを見ると、いわゆるリピーターの存在が確認でき、利用者による講座等への継続参加が行われている。

リニューアルについては、館内での基本構想原案の作成まで進めた。

【課題】

常設展の多言語化については、予算化できず、十分な成果をあげることができなかった。学校団体の来館時期が集中しており、オーダーメイドの学習プログラムを実施できる学校数を大幅に増やすことが難しい。

今後は企画展・特集展関連事業の数を増やすことだけでなく、各展覧会を横断するようなテーマを設定し、館全体として統一性をもった講座等を開催する。これにより、利用者がより様々な分野に関心を向け、継続的な参加につなげられるものと考える。

リニューアルについて、館内での基本構想原案の検討以上に進めることはできなかった。リニューアルの方針を変更せざるを得ず、できることは第3期中期目標の中で具体化させることにした。ただし、大きな予算を伴う展示室のリニューアル等については先送りとなった。

４．楽しめて出会いのある空間の創出

【成果】

ミュージアムグッズの開発と販売の試行を、企画展と連動して実施することができた。

体験型学習機会の促進については、平成26年度民俗分野の「紙漉き体験」を新たなメニューに加えることができた。また、年々民俗分野「昔の道具」体験の要望が増加し、日程調整や内容を工夫することで要望に応じることができた。また、ＧＷや夏休み中に家族の来館者が増えることを踏まえ、体験学習室に体験メニューとしてミニミニ博物館を開催し、大変好評であった。さらに新メニューとして夏休みに「親子で探検！はくぶつかんのウラ側」を2回開催し、新たな博物館の魅力を伝えることができた。

【課題】

ミュージアムショップの設置は実現できなかった。ミュージアムショップは、単なるグッズ販売という意味だけではない。博物館の中の交流の場として、地域連携なども視野に入れながら今後も検討を続けてゆく必要がある。

体験メニューの内容が分野によって偏りがある。企画展や季節に応じた通常利用できる体験メニューを考案する。「昔の道具」などの講座にボランティアの起用を考えていく必要がある。

５．博物館事業への住民参加

【成果】

資料整理ボランティアは、当初計画のあった自然標本整理と古文書整理に加え民俗資料整理が途中から加わり、整理対象となる資料が増加した。ボランティアに携わる人数や回数も増加し、自然資料のボランティアは展示作業にも参画し活動の幅が広がったと総括できる。

【課題】

今後のボランティアの受け入れについては、現状を維持しながらも、活動の枠組みを資料整理を中心として分野（対象資料）を拡大するのか、あるいは資料整理にとどまらない新たな活動まで範囲を広げるのかの検討が十分でなかった。今後ボランティアコーディネーターの導入も見据え博物館活動とボランティアの関係性を建設的に議論していく必要がある。

６．博物館情報の発信と公開

【成果】

広報ツールの多様化を実現し、持続的で積極的な運用を行えた。また、平成 29 年度に設けたシンボルマークの活用による統一イメージの構築を図れた。デザインの精度をあげることで広報効果の向上を図った。

【課題】

展示、主なイベントの広報ポイントなどを適切に把握することが不十分だった。広報に内容を特化した企画展・特集展、主な催しものの事前打ち合わせを行うことを課題としたい。また、広報戦略のための情報収集として、広報効果の測定方法を検討課題としたい。

７．地域ネットワークの拠点

【成果】

教職員・学校団体を中心に博物館の利用促進、学校での博物館の活用方法の浸透を進めるための博物館連携事業を拡大してきた。さらに、「博物館でも読み聞かせ」などの活動を通して、地域で活動する読み聞かせ団体の活動の場の提供と県教委重点目標である「子どもの読書推進」を進めることができた。

【課題】

地域で活動しているさまざまな団体と当館事業の関連付けを視点として連携できる団体の発掘をさらに進めていく必要がある。各団体と共同して活動したり、活動発表の場を提供したりしながら団体の育成を図るとともに、当館の事業と結びつけ当館事業の魅力アップにつなげていく取り組みを強化する必要がある。移動展については、他館からの要望に応じて実施している状況で、計画的な連携事業にはできなかった。

８．新しい観光ニーズへの対応

【成果】

観光団体や文化施設間の連携体制を多様に構築することができた。それに伴い、共通の広報ツールの開発、相互広報などの実績をあげることができた。

【課題】

学校団体の動向分析とそれに伴う対応改善が十分に行えなかった。

９．使命の明示と事業の点検

【成果】

中期目標の達成状況は毎年公表し、また必要に応じて使命の一部見直しを実施した。

企画展アンケートの結果では、おおむね満足度８０％は達成できた。過去の常設展アンケートの結果を、リニューアルのための課題・問題点の整理の中で活用することができた。

【課題】

アンケートの結果や利用者の声への対応状況を公表することはできなかった。

10. 人材の育成と機能的な組織

【成果】

学会、研修会等への出席は毎年継続して行うことができた。

【課題】

学会や研修会での成果を学芸員全体で共有したり、業務へ効果的な反映させることについては、十分でなかった。学会や研修会の専門性が高く、共有して効果のあるものばかりでなかったことも理由である。新規採用の学芸員が増えてゆく中で、今後も研修等への参加を通じて能力の向上に努めることは重要である。

11. 危機管理

【成果】

災害発生時に備え、来館者の安全確保、職員の安全に関する意識向上及び災害発生時において適切な行動ができるよう、定期的に訓練を行った。また、建築物や設備について定期点検を行って劣化状況を把握すると共に修繕予算を確保し、平成 30 年度には屋根と外壁の全面改修を行った。

【課題】

福島県県有建物長寿命化指針（H26 年 6 月）では、軽微な劣化が見られた段階等で早期に対処する「予防保全」と不具合が発生してから修繕等の対処をする「事後保全」を組み合わせた「計画的な保全」への転換を示しているが、予算の確保が難しく老朽化により使用できない設備の改修等を行うことができない。

12. ふくしまの宝の発掘と保全

【成果】

福島県被災文化財等救援本部に参画し、被災文化財等の収集や整理等を継続して行うことができた。被災地域の資料館・博物館のレスキュー作業を完了することができた。

【課題】

当初の目標は救出・収集した資料の保全とともに調査研究を進めることであったが、とくに調査研究までは手が廻らなかった。被災地域の寺社や個人所蔵の資料を救出・保全する場合には、さまざまな課題があり、公的な資料館・博物館資料のレスキュー作業と同じように進めることが難しくなった。

13. ふくしまの宝の公開と活用

【成果】

毎年常設展や企画展の中で救出した文化財・資料の展示を行った。

【課題】

東日本大震災の被害から救出された資料を、特別な意味を込めて展示することは少なくなった。しかし、自然災害や社会状況の変化によって散逸の危機にある資料への対応は、今後も必要である。

14. 福島の再生と活性化

【成果】

５年を通じて、毎年震災に関するイベントを継続して開催してきた。避難者に対して学習や文化的な楽しみの機会を提供するとともに、比較的被害の少なかった会津地域に居住する方々にも震災についてさらに考えを深めていただくことにつながった。

【課題】

会津という地理的要因もあってか、震災・復興に関する事業の持ち込みはさほど多いとはいえない。今後は震災の記憶を風化させないために、様々なネットワークを利用して当館が主体的に各地の文化支援策を企画し、実行していく必要がある。

15. 「震災遺産」の保全による震災の共有と継承

【成果】

東日本大震災で生じたモノ・バショを博物館資料と位置づけて収集・保全・普及活動を精力的に展開し、博物館資料に「震災遺産類」が追加された。これは、新規大規模収集において、分野横断的に実施した保全活動の成果である。

【課題】

博物館資料「震災遺産類」を保存・活用してゆくために、新分野を確立すること、震災遺産を常設展示することが課題であるので、第 3 期中期目標において課題を解決したい。

16. 新たな文化事業の創出と定着

【成果】

県内の各団体、県外のミュージアムとの連携につながる体制を設け、事業の実施を通じて連携基盤を構築した。事業の実施により、県内各団体の事業運営スキルの向上も図った。

【課題】

事業の継続的な実施により、連携体制の強化が必要とされる。その過程で、経験や知見が共有され、福島県内の各団体の事業運営スキルがさらに向上することが望まれる。